

サブサハラ・アフリカの高出生率は幸福か？－希望子ども数と理想子ども数－

High Fertility in Sub-Saharan Africa Means Happiness?: Desired Number of Children and Ideal Number of Children

大橋 慶太 (国連人口基金)

Keita Ohashi (United Nations Population Fund)

ohashi@unfpa.org

キーワード：サブサハラ・アフリカ、出生率、幸福、希望子ども数、理想子ども数

サブサハラ・アフリカの出生力転換は 1990 年代から始まっているが、その低下速度は、国際社会の予想よりも緩やかである。1990 年代後半から 2000 年代前半にかけては、HIV/エイズの感染率が最も高くなった時期であり、国際社会の関心はその予防に力が入れられた。よってこの時期、サブサハラアフリカでは、出生力の低下は停滞した。その後 2000 年代後半から出生率の低下は再開しており、現在の出生率は 5.1 である。この数字は、その他のすべての途上地域で出生率の低下が大きく進んだことを考えると、依然特に高い水準である。

サブサハラ・アフリカでは、伝統的に多くの子どもを持つことが、子孫の繁栄、将来の仕事や老親への援助とともに、人として家族としての幸福をもたらすものと考えられていた。男性も女性もともにこの考えには同意するであろう。出生率が下がり始めた現在でもこの考え方は維持されているのではないか。サブサハラ・アフリカでは、キリスト教徒とイスラム教徒の割合が高いが、宗教的にもこの傾向を支持していると思われる。

人が幸せかを判断する指標はさまざまなものが使われているが、この報告では、まずは未婚男女の希望子ども数と既婚男女の理想子ども数の推移を検証する。これは、出生率が低下し始める中で、希望子ども数と理想子ども数も変化しているのかを考察するものである。次に、出生率（実際の子どもの数）とアンメット・ニーズ（望まない子どもの数や望まない子供を産む時期）の差を検証する。これは、希望子ども数や理想子ども数の推移に対して、出生率とアンメット・ニーズが同様の動きをしているのかを考察するものである。この報告では、人口保健調査（DHS）のデータを用い、サブサハラアフリカ諸国の中で 1980 年代後半から現在までに、複数回 DHS を実施してきた国の状況を分析する。